三時間で介護保険

[illegible]

芥川龍之介 I

＊吉田精一著作集 1

桜楓社

吉田精一著作集　第一巻

芥川龍之介 I

昭和五十四年十一月十二日　第一刷発行

定価　一八〇〇円

著者　吉田精一

発行者　及川篤二

発行所　(株)桜楓社

東京都千代田区猿楽町二―八―一三
電話東京03二九五―八七七一(代表)
振替東京六―一八〇二〇郵便番号一〇一

© 吉田精一　一九七九年
Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替え致します。

0395-791163-0723

吉田精一著作集　第一巻　目次

I 芥川龍之介 5

一 出生 7
二 芥川家 11
三 本所小泉町 17
四 中学時代 21
五 高校生活 27
六 第三次新思潮 36
七 初恋 46
八 羅生門 53
九 夏目漱石 61
一〇 第四次新思潮 68
一一 初舞台 79
一二 海軍機関学校 88
一三 第一創作集 93
一四 結婚 104
一五 傀儡師 110

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

一六 我鬼窟 125
一七 影燈籠 133
一八 人工の翼 137
一九 夜来の花 142
二〇 中国旅行 152
二一 春服 156
二二 歴史小説 164
二三 階級文芸 168
二四 大震災 173
二五 黄雀風 176
二六 芭蕉雑記 182
二七 澄江堂句集 188
二八 文芸読本 192
二九 越し人 197
三〇 湖南の扇 202
三一 鵠沼 208
三二 蜃気楼 214
三三 玄鶴山房 218

三四 河童 223
三五 文芸的な、余りに文芸的な 233
三六 三つの窓 241
三七 西方の人 245
三八 歯車 250
三九 七月二十四日 257
四〇 葬儀 260
あとがき
*
第一巻 芥川龍之介あとがき 262
解説 264

I

芥川龍之介

一　出　生

芥川龍之介は、明治二十五年（一八九二）三月一日、東京市京橋区入船町八丁目一番地に生れた。こゝは当時外人居留地になっていて、龍之介の姉久子の追憶によれば、このころ日本人で戸を構えているのは芥川家ともに三軒きりだったという。（全集月報第二号）我々は明治初期の銅版画で有名な築地居留地の図をこの事実の内に空想する。生後間もなくこゝを去った龍之介に、直接の記憶のあろう筈はないが、姉や伯母達の思い出話はもれきいていたに相違ない。その結果彼が開化期の面影を髣髴させるその生地に郷愁を抱き、又更に開化期日本の、不思議な調和を示した和洋折衷の風景に、強い関心をひかれたであろうことは、想像に難くないのである。彼はそうした開化期特有の異国情趣を主題として（主材ではないが）「開化の殺人」「開化の良人」「舞踏会」などの小説を書いている。そうして築地居留地の風景――雲母のような波を刻んでいる東京湾、いろいろな旗を翻した蒸気船、往来を歩いて行く西洋の男女の姿、それから洋館の空に枝をのばしている、広重めいた松の立木（開化の良人）――に、懐しみをこめたまなざしを投げているのである。

龍之介の実父は新原敏三といい、山口県人で、牛乳屋を業とし、新宿と築地入船町に牧場をもっていた。実母の名はふく。芥川氏の出である。龍之介は長男で上に二姉があり、父四十二歳、母三十三歳のいわゆる大厄の年の子である。そこで旧来の迷信から、捨子としての形式を踏むことになった。拾い親は松村氏で、父の店の支店をあずかる人だった。よし形式的にもせよ、彼は一応親から捨てられたのである。出生の第一

歩にあたって、暗い影をすでに落し初めたかにもみえる薄倖な彼の運命(ほし)は、生後一年足らずの内に、幼児としての最大の不幸を宿すことになったのである。それは彼の母の発病であった。

龍之介の母はきわめて小心な、内気な気質の人であったという。そして彼女の夫は、龍之介の描写に従うならば、「僕の父は又短気だつたから、度々誰とでも喧嘩をした。僕は中学の三年生の時に僕の父と相撲をとり、僕の得意の大外刈りを使つて見事に僕の父を投げ倒した。僕の父は起き上つたと思ふと、『もう一番』と言つて僕に向つて来た。僕は又造作もなく投げ倒した。僕の父は三度目には、『もう一番』と言ひながら、血相を変へて飛びかかつて来た。この相撲を見て居た僕の叔母——僕の母の妹であり、僕の父の後妻だつた叔母は二三度僕に目くばせをした。僕は僕の父と揉み合つた後、わざと仰向けに倒れてしまつた」(点鬼簿)というような激しい性格の持ち主で、又牛乳屋として小さい成功者の誇りをもっていた。だから彼の母は、普通の妻よりは、夫に仕える上で心を痛めることも多かったであろう。その上に龍之介の生れる前年には、きわめて怜悧だった長女初子を失っている。それも彼女にとっては、自分の責任として深い自責の念を感じる事情にあった。そして長男たる龍之介は旧弊な人々の御幣をかつぎ勝ちな厄年の子で、捨子の形式までして育てねばならない。それやこれやで彼女の狭い女心の悩みは、人知れぬ重圧を以て、肉体や精神にのりかかって来たのであろう。彼女は龍之介の生後九ヵ月頃から発狂してしまった。生きることだけはその後十年間も生きつゞけて、彼の十一歳の年に死んだのである。龍之介はこの母について後年追懐して云っている。

「僕は一度も僕の母に、母らしい親しみを感じたことはない。僕の母は髪を櫛巻きにし、いつも芝の実家にたつた一人坐りながら、長煙管ですぱすぱ煙草を吸つてゐる。顔も小さければ体も小さい。その又顔はどういふ訳か少しも生気のない灰色をしてゐる。僕はいつか西廂記を読み、土口気泥臭味の語に出会つた時に忽

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

ち僕の母の顔を――痩せ細つた横顔を思ひ出した」（点鬼簿）

この母の発狂が、龍之介の精神にあたえた影響は大きかった。狂人の子という自覚と、狂気の遺伝を恐れる心が、彼の肉体の衰弱と共に次第に激しさを加え、自殺を促す一因をなしたことは、後述する所によって明らかであろう。彼はこの父母の子たることを嫌忌していた。「人生の悲劇の第一幕は親子となつたことにはじまつてゐる」といい、「遺伝、境遇、偶然、――我々の運命を司るものは畢竟この三者である。自ら喜ぶものは喜んでも善い。しかし他を云々するのは僭越である」（侏儒の言葉）という彼の言葉の裏には、そうした苦しい気持が反映しているのである。

龍之介の本名――実父敏三が命じた名は龍之介である。戸籍謄本控え、養子縁組みについての裁判所判決原本などには何れも介とある。しかるに彼の少年時代の自筆の文、及び養父芥川道章が実父新原敏三にあてた養子縁組み「証」の一札には「今般貴殿長男龍之助殿云々」とあり、芥川家の方では、ある期間「助」の字を用いている。龍之介は十一歳頃芥川氏を冒し、その頃から龍之介と改めた（竹内真、「芥川龍之介の研究」）という説があるが、然し中学生時代の作文にも龍之助と自ら書いて居るものがあり、第一高等学校の卒業生名簿、東京帝国大学卒業生氏名録などには、芥川龍之助とある。或は一時の戸籍面には龍之助とあったのでもあろうか。中学二年前後からは、自称をも介に統一していて、それを本名とみとめたことが知れるのである。龍の字は辰年辰月辰日辰刻の生れによるものと、自ら記した年譜にある。それはともかくとして、我々は次のような逸話をもっている。彼の遺骸が谷中の斎場から日暮里の火葬場に運ばれ、焼竈の中に移された時、その門扉の名札が「芥川龍之助」となっていた。これも恐らく役場から回って来た公文に龍之助とあった為であろうが、それを見た谷口喜作が、「どなたか硯をもつて来て下さい、仏が気にしますから字を改め

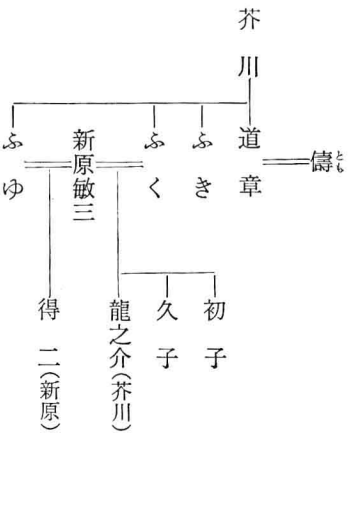
ます」といって、「龍之介」と改めさせた。恒藤恭は、よく注意してくれたと、谷口に礼をのべたという。この話は小穴隆一も恒藤恭も書いている。恒藤恭によれば（文芸春秋、昭和二年九月）生前の龍之介は、龍之助と書かれたり、印刷されたりすると、「参ったやうな、腹立たしいやうな、浅ましいやうな感じ」をもっていた。彼の愛読者や、彼を敬慕していると称するものが、偶々宛名を「芥川龍之助様」と書いて来ると、「度し難い輩だ」というようなことを呟いていたという。このことについて、恒藤は、彼が「龍之介」という自分の名を甚だ愛し且つ一種の誇りをもっていたからだ、と解釈している。今日の我々は、彼の本名を龍之介と考えてよいと思うが、何故に一時にせよ龍之助を名乗り、又公文にもそうあるかについては幾分の疑問がないでもない。猶これに関連して龍之介私生児説が小穴隆一の「二つの絵」によって出されているが、これは現在のところ信憑性がない。少くともそれを証明する外部的な証拠は見出せないのである。

二　芥川家

母の発病によって、龍之介は母の実家芥川家に入った。当主道章は母の実兄で、龍之介の伯父にあたる。東京の人で、家は代々お奥坊主として殿中に奉仕していた。龍之介がのちに自らを芥川氏十六世の孫（臘梅）と称している所を見れば、由緒ある旧家というべきであろう。嘉永新鐫本所絵図によれば、本所松坂町の土屋佐渡守の邸と通りを隔てて向いあった五軒の内に、芥川の苗字が見える。龍之介が入った当時は、本所区小泉町十五番地にあたっていた。こゝで龍之介は十八年間をすごした。そして、本所の風物が少、青年期の彼にあたえた影響は極めて大きいものがあった。

芥川家に入ったとはいうものの、龍之介は直ちに入籍したのではない。彼が芥川姓を冒したのは、実母の死後で、十一歳以後のことであった。たゞ実母の病気と、芥川家に子がない為に、その上に実母の姉で、終世嫁さずに家に留った伯母ふきが、彼をきわめて愛した為に、龍之介も芥川家を嗣ぐようになったのである。

彼の実父新原敏三は、龍之介二歳の時、築地入船町を引払い、芝新銭座に移った。龍之介の母の歿後は、その実妹芥川ふゆを後妻とした。芥川家と新原家の関係を必要な限りに於て図示すれば左の様である。



かくして龍之介は芥川家に人となった。芥川家の家風や生活は、芥川文学の性格の一半を形成したといっても過言ではない為に、これについては、やゝ悉しく語らねばならない。

芥川家は間口七間半で、部屋数は女中部屋も入れて六間の、平屋建ての住居だった。(小穴隆一、鯨のお参り)庭もついている門構えの家で、本所小泉町あたりの仕舞うた家としては、相当の体裁を備えたものというべきだろう。そのすぐの周囲には小商人や手職の職人達や、小官吏の貧しい住居の多い——彼自身の叙述によれば、「彼の家のまはりは穴蔵大工だの駄菓子屋だの古道具屋だのばかりだつた。それ等の家々に面した道も泥濘の絶えたことは一度もなかつた」(大導寺信輔の半生)——当時の小泉町界隈では、芥川家は相当広い敷地と、門構えや塀からのぞいている臘梅や五葉の松の植え込みなどによって、旧家の誇りを示してい

たものと思われる。

然し物質的な方面からいえば、道章は多少の財産、地所をもっているほかに、東京府に勤務し、土木課長をつとめていた。「つとめ人」たる彼の家の生活は、地味できりつめた、「体裁を繕ふ為により苦痛を受けなければならぬ中流下層階級」の生活だったに相違ない。それでも彼の幼い頃には二人も女中を使っていたり、（追憶）又「着物はいつも絹物を着て」（月報第二号）いたりしているのを見れば、後年彼が自虐的な気持で、必要以上に誇張して書いた、「大導寺信輔の半生」の中にいうほどの、さし迫ったものではなかったろう。一家揃って遊芸を学び、趣味に遊ぶ余裕さえ残していたのである。

芥川家の家庭生活には、江戸の文人的な、乃至通人的な趣きが多分にあった。とくに下町的な江戸情趣の匂いが沁みこんでいたようである。伯母や養父母は何れも文学を好み、歌舞伎などをよく見ている。家系の上から云っても、養母は、江戸末期の大通人、細木香以（津藤）の姉の子である。又香以の孫えいは、龍之介の叔父新原元三郎の妻となっている。生粋の江戸人の気質と趣味とは、芥川一家に色濃く流れていたのである。彼の一家は揃って一中節を習い、養父は南画をよくし、又盆栽や俳句を玩弄していた。龍之介が若くして画や骨董に興味を感じるようになったのも、こうした家庭の雰囲気が影響したのであろう。和漢の書籍もかなり多く蔵していたらしく、龍之介が自ら「子供の時にうけた旧弊な教育のおかげで、昔からあまり現代に関係のない本を読んでゐた」（私と創作）というように保守的な下町風の趣味教育を受けたのである。

後年の龍之介は極めて礼儀正しく、義理堅く、その為に後輩の人々に気詰りを感じさせるほどだったといわれる。そうした性格も態度も、芥川家の家風や教育の然らしめる所であったろう。一般に下町の由緒ある旧家ほど、山の手にくらべて却って礼儀作法にやかましく、義理を固執し、しきたりを守り、きまりきまり

にきびしい。山の手からは品が悪いといわれそうな洒脱繊弱な江戸の音曲や絵画に親しむ一面に於て、あくまでも折目正しく、形式のことに極めて神経質で、従ってこり性で、時には趣味の為に実質をも犠牲にすることが、下町の中流階級にはよくある。こうした空気の内に幼年時より殆どその一生を過したことは、彼の性格に、従って彼の作風や文芸態度に、ぬき難い影響をあたえた。我々はたとえば、あく迄も格を崩さぬ彼の古典的な文体の中に、実にひょいと、生粋の下町人特有のくだけた言い回しを発見し、彼の生地を見たという感をもつことが多い。勿論彼は彼の文学的時代に特有な精神から、「文人趣味を軽蔑するものなり」（続野人生計事）と称し「所謂江戸趣味に余り尊敬を持つてゐない」（澄江堂雑記）といい、「徳川時代の戯作や浮世絵に、特殊な興味をもつてゐる者ではない」（孤独地獄）とも云っている。意識的には或はそうであったろう。然し無意識の裡に彼ほど文人的生活を露わにし、江戸趣味や徳川文学に親しんでいた近代作家は稀であった。

芥川家で龍之介を最も愛したのは彼の伯母であった。伯母というものの、幼時彼を抱寝して牛乳で育てた為、親に等しかったという。龍之介によれば「家中で顔が一番私に似てゐるのもこの伯母なら、心もちの上で共通点の一番多いのもこの伯母です。伯母がゐなかつたら今日のやうな私が出来たかどうか分りません」（文学好きの家庭から）のであった。そうして彼の方でも亦「彼は彼の伯母に誰よりも愛を感じてゐた。一生独身だつた彼の伯母はもう彼の二十歳の時にも六十に近い年よりだつた」（或阿呆の一生）といっている。しかし愛するが故に互いに傷つけあったこともないではなかった。自殺を決意した後に彼は佐藤春夫に、「僕の生涯を不幸にしたものは××なのだよ。もつともこの人は僕の無二の恩人なんだがね」（是亦生涯、「改造」昭和二年九月）と語ったという。この××は伯母をさすものに相違ない。要するに善悪二様の意味で、彼に直接に影響することの深かったのはこの伯母だったのである。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.